

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

先日、金沢で古い日本画を修復している方の工房を訪ねる機会を得ました。その工房は、金沢でも昔からの職人さんたちが多く住んでいる、大変風情のある佇まいの一隅にありました。昔ながらの茶屋造りの建物の階段を昇って作業室に入ると、そこには一見して、良いものに違いないと思える、古びてこげ茶色に古色を帯びた観音像を描いた軸が下がっており、既にかかなりの絵具が剥落して図像ははつきりとはしていないのだけれど、どうやら平安時代あたりに描かれたものらしかった。

作品は既に修復が終わっていて、墨色の風格ある画面には、紫色を主体にした表装裂が使用されて軸装されていました。このように大変古い時代の作品では、絵具層が剥落しかかっている事が殆どです。こうしたところには薄い膠溶液をさして絵具の固着力を回復させます。本紙が多くの損傷を受けて欠損しているところも数多くあるので、コバルトを照射してわざと劣化させた絹を欠損した形に切り取って表から補い、これには本紙と同じ基調色を塗って補削した部分を目立たなくさせます。(裏打ちの薄美濃紙にも、本紙の色調を考慮した色が染められています。)日本画の修復では、この後に絵具の剥落部分に補彩はまず行われません。この作品でも、この段階で、つまり図像がはっきりしないままで修復を終えていました。

しかし私はいつも、こうした日本画の補彩に関する姿勢を目の当たりにするときはいつも、ある種のすがすがしさを感ずるのでした。修復のモラルの未熟な時代、古びた仏像はキンピカに箔が張られたり、(ひどい時はペンキで)建築物も無造作に塗装し直されたり、油の修復でも昔の修復家は、まるでそれが彼の新作となってしまう程に剥落個所以外にもはるかに広めに補彩を塗り広げてしまったものなのです。以前に来日していたダ・ヴィンチの名作「白貂を抱く貴婦人」の背景にしても、多少のキズに対して背景を全部真っ黒に塗り潰してしまっていて、グレーの濃淡で描かれたオリジナルの背景は覆われてしまっていました。このように、昔の修復は

補彩と言うよりむしろオーバーペインティングの感が強いだけけれど、今でも時折びっくりしてしまふような近年の粗っぽい補彩が施されている作品に出会います。そういう時は、随分やる気のないうか、絵に対して愛情のない修復家が居るものだと思ってしまうます。

油絵作品に関して、よく聞かれるのは古い作品で、補彩があるのはいいか悪いのか、補彩があると価値が下がるのか、という質問です。実際、この質問に答えるのは結構骨が折れるのです。当然、まったく無傷で裏打ちもなく、補彩もない「うぶ」な状態の作品は古いものならば、稀少ですから、それはすばらしく、またそれだけ価値の高いものでしょう。時折そんなモノや、クールベなどの作品にぶつかると、なんだか嬉しくなるし、この作品が守られてずっとこうだといいなと折るような気になります。

しかし、大概はそうはいかない。紫外線で見ると殆どの物は補彩が入っている事が多いのです。私としては、無意味な補彩が入っている作品はなるべくオリジナルの絵具を傷めないように古い補彩を落として、ぎりぎり必要最低限の補彩を差し直す事にはしています。油絵の世界では、今のところこのように大変見苦しい傷、損傷のあるところは放置するとむしろ作品の価値は低くなり、ひどく沢山の補彩のある作品もキズの多い作品として

価値は低く見られます。(ね、微妙でしょう)修復をやっていると、一番嫌だなど思う事はぶっちゃけて言うところとちゃんとした修復のテーゼを理解してくれない画商さんから仕事を受ける事。全然必要ない乾燥亀裂(それも作者の特徴をなして絵画の一部となっているようなもの)にも神経質に充填・補彩を無理矢理注文したり、時代の経っている紙の劣化の激しい水彩画なんかの紙を真っ白に漂白してくれ、などと言われると、「そんなことはしないもんですぜ」となんとか説得を試みるものの、時々はまだたく言う事を聞いてくれない。そういう時は仕方なく他を探しておくんなさい、ワタクシは嫌でございます、と申し上げるのだけれど、同時に自分も結構気の強いおばちゃんになったんだワなんて思う。とにかく、最近はあるべく知識の深い絵を大事にする画商さんと付き合う事になっている。



マリローランサン (部分)



紫と黒のボツボツ補彩(多数の補彩線)が入っているのが判る。

言うけど、ほんとに少ないか、どのくらいの量で、どこにある?」とか、いつかはフランス人がしつこく「エスク・セ・シレ?」って言うのを何回も聞いた。(シレって言うのは仏語の修復用語でワックスの裏打ちのために絵具のマチエールがベツタンコにつぶれてしまった画面を指すのです)うーん、あのねー、どうでもいいけどこの電話ってアトリエから転送されて私の携帯にかかってんのね、転送ってことはこの国際電話代って私持ちってことなんですよ……! それに、恥ずかしいじゃないですか、ここは横並び座席の電車の中、このヘタタクソな英語を話している私の身にもなつて下さいよ、みんながこっち見てるじゃあないですか。補彩がどこにあるかって、そんな昔の作品の事、家に帰らないとわかんないよ、え?聞かない? もっと大きな声で? ふ、ふえー! ……と。このように、補彩のあるなしは、画商さんにとつては大変重要な問題なのです。

ところで、先にお話した金沢の掛け軸、帰る時まで気になっていたひとつの質問をとうとうしてしまつた。暗く沈んで絵柄のはつきり見えない観音様の図に対して、私が通常見ている美術館等での軸装の表装裂の選択より、なんだか派手な気がする。この紫の色、金欄の柄は、この時代のものに適正なのですか? この柄はこの時代のものの復元ですか? (国宝や重文クラスのものには、同



ベッドの下方に不必要に広範囲な補彩がある。